研究だより　NO.45

平成２６年度　　研究の概要

発刊にあたって　……１
これまでの研究の経緯　……１
研究大会を終えての成果と課題　……２
次期研究に向けての取り組み　……２～３
教科等の研究実践　……４～８
総合学習シャトル　総合学習CAN　……９～１１
研究文化の醸成　……１２
あとがき　……１２

香川大学教育学部附属坂出中学校　　発刊　平成２７年２月２５日

発刊にあたって

学校長　伊藤　裕康

春暖の候、皆様方におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

本校は、社会構成主義を基軸とした学びの在り方について研究を進め、学習指導要領の趣旨の本質について注意深く思考しながらも、新たな時代の新しい学びについて模索し、実践を積み重ねております。昨年６月13日には、研究テーマ「『学ぶこと』と『生きること』の統合―語り合う合う中で、自己の『ものがたり』をつむぐ―」のもと、ナラティヴ[1]・アプローチとしての「語り」の研究を継続し、個々の学習者の学びの文脈に沿う学習指導法を「自己物語」の視点から追究するとともに、認知心理学の知見に基づく、認知的個性（CI）[2]の学びへの活用についても研究を深め、生涯学習を視野に入れた「学ぶこと」と「生きること」の統合を具現化するカリキュラム構想について提案を致しました。

本号では、これまでの研究の経緯と昨年の研究大会の成果と課題をまとめるとともに、次期研究大会に向けての取り組みの概要を紹介しております。特に、個々の学習者の学びの文脈に沿い「自己物語」の視点から追究する学習指導として有効である「ものがたり」を、自家薬籠中のものにすべく志向した取り組みを紹介しております。また、教師が「個々の学習者にいかにかかわるか」を重視し、個々の生徒の学びの個性である認知的個性（CI）の多様な活用を探っております。ご一読の上、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いに存じます。皆様には、どうか今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

〔研 究 主 題〕

「学ぶこと」と「生きること」の統合

― 語り合う中で自己の「ものがたり」をつむぐ（第一次終了）―

１　これまでの研究の経緯

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきた。平成16年度からは、学びの意味や価値を実感できる「学びの意味化」を実現するためのカリキュラム構築に取り組み、24年度大会では、「対話」と「内省」のあり方を追究することで、学ぶ意欲の向上を図るカリキュラム構想について提案した。本年度は、ナラティヴ・アプローチとしての「語り」の研究を継続しつつ、個々の学習者の学びの文脈に沿う学習指導法を「自己物語」の視点から追究するとともに、認知心理学の知見に基づく、認知的個性（CI）の学びへの活用についてもさらに研究を進め、生涯学習を視野に入れた「学ぶこと」と「生きること」の統合を具現化するカリキュラム構想について提案した。

1　ナラティヴ（語り、物語）という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。（野口裕二『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009）本校では、振り返りを語りの視点から捉え直す自己理解法と考えている。

2　様々な認知的な能力やスタイルなどの個人差を包括的に捉え直す、個性の新たな概念。松村暢隆他『認知的個性』ミネルヴァ

2　研究大会を終えての成果と課題

（1）成果

○総合学習CANにおける生徒の達成感（86%）が前回より向上し、探究心や興味が芽生えた。
○今後の学習指導要領で重視されるであろう学習意欲や生徒の主体性に着目した研究であった。
○言語活動の中で「聴く・問う」が重視され、生徒が主体になっている授業提案であった。
○教科学習においても認知的個性を導入することで自己肯定感を向上させるのに有効であった。

（2）課題

●授業における「語り」の質のさらなる向上が必要である。
●認知的個性の多様な活用方法の研究開発を進める。
●「ものがたり」が成立しない生徒への手立ての追究をする。
●「ものがたり」の授業の普及、発展を推進する。

3　次期研究に向けての取り組み

（1）「ものがたり」とその必要性について

◆「ものがたり」について

物語論には様々な考え方があるが、本校では、やまだの物語の定義[3]「二つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」をもとにして、「経験を有機的に結びつけ、学ぶことの意味や価値を自己に引きつけ、自己を形成すること」と独自に捉え「ものがたり」と平仮名で表記している。授業で例えると、これまでの学びが個の中の文脈（過去の経験や身近な現象など）と結びついて、学習対象に対する見方や考え方が変化し新たな筋立てが生まれる行為となる。単なる「わかる」「できる」などの了解や解釈ではなく、新しい意味や価値の生み出しを可能にし、感性も豊かになる。今後はさらに「ものがたり」の概念を再検討し、授業に活用できるようにしていきたい。

◆「ものがたり」が必要とされる背景[4]

・「情報・消費社会」が問題となり、サイバースペース上に人間の生活や教育が拡張
→集団空間の中で他者と交わる必要なし
→ネットワーク上の関係なので他者への視界が利かなくなり情報活用の批判的側面が失われる
→間接体験の比重が増し、生活の実感が薄れ、あらゆる経験に実感が伴わない

↓

・人間の相互関係が希薄化
→社会関係が無葛藤となり、自分と他者をすりあわせ自分らしい自己像の把握が困難に
→あれこれと選択させる企業戦略で一つの価値やスタイルに自分を統合することが困難に

↓

アイデンティティ（自分を知ること）の揺らぎ

↓

・そこで、仲間とともに自分とは何者か語り合うことが大切
→自分を理解してもらうために、ストーリー性をもったわかりやすい形式で自分の過去を語る
→語り手と聴き手の相互作用の中で新たな「ものがたり」が生み出される
例）「自分は～人間なんだ」「なるほど～考えもあるな」「やっぱり友人も同じ考えだったんだ」
→語りが他者に受け取られ、他者と自己をすりあわせていく中で自分らしさを明確にしていく

↓

自己形成のきっかけとなり、多面的に（様々な立場で）ものごとや自分を見ることができる

3　やまだようこ『人生を物語る』ミネルヴァ書房、2000
4　伊藤裕康「『物語り』を活用した授業づくり」香川大学教育実践総合研究第23号2012

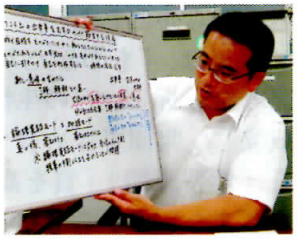
◆その他の利点

・その１：「生きる力」になる
○人は、ものがたることを繰り返しながら、過去を再構成することで未来を指向して生きようとする力を得ることができる
・その２：記憶定着のよい形態をつくる（知識の習得に有効）
○個々ばらばらの出来事ではなく、意味化（筋立て）すると記憶しやすく、語りやすくなる
○過去経験にまつわる知識は、他者に語ることによって定着する
○知覚機能自体にストーリー性を求める傾向がある
・その３：人に何かを伝達する際、感動させたり、気持ちを動かしたりすることができる

（２）「ものがたり」の視点を導入した授業実践及び共同構成的な研究討議

・言語活動（対話・語り）によって知識が構成される授業（社会構成主義の授業）
・単元の中に論理実証モードだけでなく、物語モードが位置づけられている[5]授業
・学んだことと様々な経験や出来事が個の中でむすびついて、新たな見方や考え方に気づく授業
・様々な文脈（文化・社会的、歴史的、生態的）を背景にして学んだことが実感できる授業

大会後は「ものがたり」を明確に授業に導入するために、上記のように視点を再整理し、授業実践を行っている。授業後の討議では、抽出生徒の実態から、生徒の「ものがたり」の成立の是非など視点を定め、その原因を分析しながら教師自身のことばで全員が語るようにし、次の「ものがたり」の授業につながるように改善点を検討し、互いに研修を深めている。



（３）語りの質を向上させるための手立て

１　クリティカルに「聴く・問う」ができる教師のかかわり
「学習とは他者のものであることばをわがものとする過程[6]」ともいわれているように他者との対話は欠かせない。前回大会までも対話の中で「聴く・問う」を重要視してきたが、自分の考えを論破するだけに終始したり、話の論点が噛み合わなかったりした場面が多く見られた。そこで、クリティカルな視点で情報や知識を多面・多角的に分析して聴いたり問うたりすることで語りの質の向上をはかる。ここでは他人の意見を否定的に見る聴き方や問い方ではなく、自分も相手もより高めるための「聴く･問う」というかかわりをめざしたい。
２　語り直しの中で新たな気づき（語り）が生まれる教師のかかわり
前回大会では、個の「ものがたり」を語るためのかかわりをめざした。次期は個の「ものがたり」を他者と語り直す中で他者の語りが自己の語りに結びついたり、教材に対する新たな疑問や、次時の学習への目標や展望など未来に向かう新たな語りが生まれたりするかかわりをめざしたい。
３　個の多様な文脈から新たな筋立てがつむがれる単元構成と問い
個から集団への「ものがたり」の成立をめざし、単元を貫く一人一人の多様な文脈を分析し、気づきを促したり新たな語りが生まれたりする単元構成と問いを考案したい。

（４）認知的個性を活かした学習支援のあり方

これまで、関西大学との共同研究として、CIの一つであるMI[7]や同時・継次を総合学習や教科学習でも活用する試みを行ってきた。今期は、新たに「対人」と「内省」を加え、八つのMIとし、それが総合学習や教科学習でどのようにはたらくか分析し、その活用の可能性を探っていく。

5　Brunerは、“物語”は、人間が物事を理解したり思考したりする際の重要な方式となっていることを指摘している。彼は、人間の認識形式/思考形式には、「論理実証モード」（paradigmatic mode）と「物語モード」（narrative mode）の二種類が存在していることを指摘している
6　秋田喜代美『学びの心理学』左右社、2012、66頁
7　多重知能（Multiple Intelligences）。ハワード・ガードナー（松村暢隆訳）『MI: 個性を生かす多重知能の理論』新曜社、2001

《国語科》

言語による認識の力をつけ、豊かな言語文化を育む国語教室の創造
― ものがたる力を高めるための指導・支援のあり方 ―

大西　小百合　　川田　英之

国語科では、言葉を意味づけ、価値を実感し、獲得していく過程を通して自己を形成していくことを「ものがたり」ととらえている。学習者が「もの・ひと・こと」とかかわり合うなかで、その言葉の意味を生成し獲得する。その言葉を媒介にして、自らの存在を時間的にも文化・社会的にも位置づけ、自分たちの文化の思考様式そのものを学んでいく。そして、言葉によって語ることで「もの・ひと・こと」とのつながりを自らつむぎだし、現実を内省し、未来を志向して自己を形成していくことができると考えている。

国語科では、「知覚化―意味化―相対化」という授業方法の研究を積み上げてきた。これまで、「語ること」によるメタ認知的変容（意味づけ）や内在化・記憶化（価値の実感）をめざした授業のあり方について研究してきた。その中で、既有知識や体験を通した語り合いによって、より実感を伴った読みが可能であること、それらの気づきが学びの意味づけや価値の実感に結びつくことを明らかにした。

今後は、「ものがたり」が成立しない生徒の語りを分析し、どの生徒にも「ものがたり」が成立し、集団で深め合うための教師のかかわりを「学習課題」「質を高める語り合い」等、さまざまな観点から考察し、実践研究していきたい。

【自分の思いを語る生徒の様子】

《社会科》

個の特性に基づいた、学びの実感をうみ出す社会科学習
― 語りあうことを通して、社会的自己物語を深めあう共同体をめざして ―

山城　貴彦　　大和田　俊

社会科では、学びの価値の実感に重点を置いた「ものがたり」をふまえながら、アイデンティティーの形成、とくに社会的自己認識の形成に重点を置いた「社会的自己物語」を深めあう学習を通して、教科目標である公民的資質の育成を図ろうと研究を進めてきた。

「物語り作文」を活用した学習を繰り返すことが、多くの生徒にとって、社会的自己認識を深めていく上で有効であることがわかった。しかし、生徒が社会的事象に対する「社会的自己物語」において、いかにこだわりや切実性をもつのか、など課題も残った。

そこで、今期の研究では、誰しももっている、その個固有の特性やこだわりに注目し、一人の生徒を中心に位置づけた授業を展開していきたい。生徒がもっている、その人間の統一的な部分に触れなければ、生徒は自分をみつめにくいし、自分を他者と比較することができない。その生徒の特性を把握するとともに、集団をその生徒の考えを深化させるための手段としてとらえ、教師の願いをもった単元を構成し、研究を進めていきたい。

【よりよい考えを生みだそうとしている様子】

《数学》

数学から学ぶことの価値を実感する「振り返る活動」
― 数学の本質に気づく「問い」と数学と自己との かかわりを見つめ直す「語り直し」 ―

大前　和弘　　中西　健三　　大西　光宏

数学科では、「数学を学ぶことの価値」を実感させるために、自分と数学とのかかわりを見つめ直すための振り返りのあり方や自分とは異なる考えをもった者との対話のあり方について研究を進めてきた。その成果として、学んだことをキーワードで語ることを取り入れたことによって、自分の学びをじっくりと振り返ることができた。しかし、課題となったのは、学んだことの意味理解にとどまり、自分自身にとっての学びの価値の実感にまでは至ってはいない生徒も少なくないことである。

そこで今回の研究では、数学を学んだ自分が、数学に何を学んだのかを自覚すること、すなわち、数学から学ぶことの価値を実感できるようにするために、数学の本質に気づく「問い」と、数学と自己とのかかわりを見つめ直し、自己の形成につなげるための「語り直し」について研究を進める。

数学の本質に気づく「問い」とは、問題解決のためにどのような数学の考え方を使ったのか、数学の力で可能になったものは何か、などを意識できるような教師からの「問い」や、生徒が学んだことから更に他の数学の既習事項との関係はないか、違う条件でも成り立つだろうかなどと考える生徒自身の「問い」である。「語り直し」とは、生徒が対話を通して学んだことを「～ということは、～ということだ」と、自分の言葉で表現する過程で、学習内容の意味理解を一層深め、数学と自己とのかかわりに気づくための行為である。このような「問い」と「語り直し」をもとにした「振り返る活動」を取り入れた数学の授業のあり方について追究する。数学が思考を後押ししてくれる経験が、よりよい自己を形成し、数学を学ぶ意欲につながると考える。

【自己とのかかわりを見つめ直す「語り直し」】

《理科》

科学的な見方や考え方を高め、理科を学ぶ意味や価値を実感できる生徒の育成
― 科学する文化の中で語られるものがたりを通して ―

若林　教裕　　鷲辺　章宏

理科では、探究の過程における交流や対話の在り方を検証しながら、単元構成の工夫や気づきを促す学習シートの開発を行い、科学的な見方や考え方ができる生徒の育成をめざしてきた。前回は、これまでの研究に「ものがたり」の視点を導入し、さらに理科を学ぶ意味や価値を実感させることをめざした。その結果、「ものがたり」の導入が理科を学ぶ意欲の向上に有効であることがわかったが、探究の過程における語りの質に深まりが見られない生徒も数多くいるといった課題も明らかになった。

【科学の目で日常を捉えなおす生徒】

そこで、今期の研究では、これまでの研究を引き継ぎつつ、科学的な見方や考え方を高める探究の過程やそこでの語りの質をさらに深めるため、「科学する文化」という視点を加えて研究を行う。これは、生徒の探究を生徒同士の対話だけでなく、人々が試行し築きあげてきた科学という文化ともつなげる視点を加えたものである。その視点を踏まえ、単元構成、対話の質の向上、語り直しの工夫を三つの柱として研究実践を行い、生徒の学び続ける意欲の向上につなげていきたいと考えている。

理科における「ものがたり」とは･･･探究の過程とそこでの語りを通して、科学的概念と生徒の経験や文脈とが新たに結びつき、自然事象を自己に引きつけて知性的、感性的に捉えなおすこと

《音楽科》

音楽のよさや美しさを味わうことのできる音楽学習のあり方
― かかわり合い、語り直すことを通して「音楽ものがたり」を深める ―

可児　智恵子

将来にわたり音楽の美しさにかかわる可能性を広げ、より豊かに生きる力を育くむことが音楽科の「学びの意味」であるととらえ、言葉や音楽を通して思いや意図を語り合い、学習者がこれまでの自分と音楽との関係を振り返り、自己の「音楽ものがたり」をつむぐことで学ぶことの価値を実感できる授業づくりのあり方について追究してきた。これらの成果と課題をふまえ、今期は「ものがたり」の質の向上をめざし深めていくために、他とのかかわり合いを見直すとともに、語り直すことができる効果的な学習のあり方について研究を進めている。

研究内容としては、〔共通事項〕を支えとして対話により思いや意図を語り合う活動の工夫、自己の音楽観を広げ深めることのできる単元・学習課題の工夫、「音楽ものがたり」を生成するための振り返りの工夫、以上３点を柱としている。

多様な感受と出合わせ、音楽に対する新たな意味を見出したり、価値を実感したりすることができるよう、教材の背景にある文化・社会、歴史、生態的な文脈と関連づけ授業を進めていく。また、音や音楽を通して生徒同士、生徒と教師、教材とかかわり合い対話する中で語り直すとともに、過去、現在、未来の自分とを結びつけ、「ものがたり」を深めることにつなげていきたいと考えている。

【他の班と意見交流をしている様子】

《美術科》

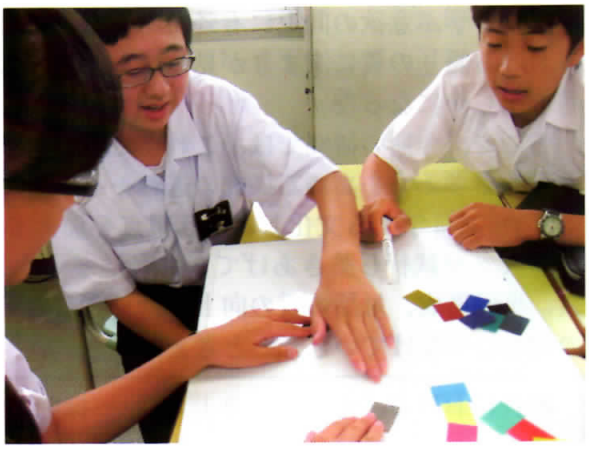
創造活動の喜びを見いだす美術の学習
― 思いを語り合い、発想を広げ感じ方を深める ―

田尾　亜貴

美術科では、創造活動の喜びを見いだすことができる生徒の育成のために、思いを語り、他の表現のよさを認め合う活動を授業に取り入れてきた。表現の活動では、自分らしい表現や味わい方ができるよう、学習過程の工夫や支援の方法を研究してきた。鑑賞の活動では、他と意見を交換しながら造形的な美しさを感じ取り、自分の価値意識を持って語り合うことをめざしてきた。

研究内容として、文化・社会的、歴史的、生態的な文脈との結びつきを実感できる題材を扱い、結びつきを実感できるような授業構成の工夫。思いを大切にし、色や形などの造形的な要素や、他者の表現の工夫や意見を取り入れ、試行錯誤しながら表現できる授業づくり。美術作品から受けた感動について、他者と語り合いながら、新たな見方に気づく授業づくりに取り組んでいきたい。

「なぜこの色？」「なぜこの形？」と問いかけることで、見方や感じ方を深めたり、自身の表現について、改めて表そうとしたことを振り返ったりすることができる。このような問いかけと語り合いによって、色や形に注目し、美術と自身のかかわりに気づいていくことが出来るよう、研究を進めている。



【考えを述べ合い色を分類している】

《保健体育》

スポーツの面白さに浸り、
生涯にわたるスポーツライフ構想の源となる保健体育学習
― スポーツの持続的実践への問い続ける「ものがたり」共同体 ―

森　由加理　　三宅　健司

スポーツには「これが正解だ。これが本物だ。」という唯一無二の答えがない。まさに、21世紀型能力が想定している①変化が激しく、②人とのかかわりの中で課題を解決し、③社会の中で意味ある解を導き出していくという「実社会」の縮図が表出している。スポーツという文化に自ら働きかけ、自らに「問い」続け、スポーツにかかわる自己を形成する保健体育は、能力差、公正・公平、平等、勝敗、連帯など、生徒達同士のよりリアルな文脈の中で21世紀型能力の育成を可能にする教科である。三年間の授業を包括する「問い」を「スポーツの本当の面白さとは何なのか？」とし、スポーツライフを豊かにする「問い」の生成へとつなげたい。

授業中の「僕は下手だからボールが来ん」「跳び箱跳べて意味あるん」という生徒達の声もこれまでの保健体育の授業にかかわるリアルな「ものがたり」である。しかし、まさしくその瞬間、その言葉が生徒達と生涯にわたるスポーツにかかわる「ものがたり」をつむぎ始める絶好の機会となる。安心・安全を保障されたなかまとの「場」で身体と身体を響き合わせながらスポーツにかかわり、スポーツを批判的、探究的、創造的に吟味し、自分の言葉で語る者と聴き取る者とがそれぞれの未来に向けて自己物語を生成し合える授業「ものがたり」をつくることが私達保健体育科の役割だと考える。

【「なぜ？」が共同体を育てる】

《技術・家庭科》

よりよい生活をめざす態度を育む技術・家庭科教育
― 語り合い、自己の生活を見つめ直すことでものがたりをつむぐ ―

渡邉　広規　　近藤　てるみ

技術･家庭科では、「よりよい生活」をキーワードに継続研究を進めている。そして現在、「よりよい生活」を、次のように捉えている。

① 持続可能な社会をめざす一人であることを意識した生活
② 自分はどのように生活を工夫し創造するか考え、実践につなげていこうとする生活
③ 意識して自分の生活を振り返り、学んだことと自分の生活とを結びつけて考え、自己の価値観を形成していく生活

【どの苗を間引くか、
対話し、意思決定している様子】

また、ひとやものや自分と対話し、多様な考えや価値観に触れることを通して、自分の生活と学んだことを結びつけながら自分なりの価値観を形成していくことを「ものがたりをつむぐ」と捉え、それが、学ぶ意欲につながると考えてきた。

今期も、再度「ものがたり」に着目する。生徒は、今現在の生活が当たり前だと思っており、それに疑問をもつことはない。そのような生徒が、今の生活は、数多くの先人の知恵や思いの歴史のもと、現在に至っているものであるということを学んだり、批判的な視点で今の生活を振り返ったりする課題設定や、多様な考えや価値観をもつ者で語り合い、考えを摺り合い、自分の言葉で語り直す場面設定を教師がすることで、今の自己の生活を見つめ直し、よりよい生活をめざす力になると考える。

《外国語科》

思考力や感性を拡充する学びの創造
― つながり、伝え合う言語活動を通して「ものがたり」をつむぐ ―

明田　典浩　　伊賀　梨恵

外国語科では、英語で表現するのが難しいと感じるコミュニケーションの場面を設定し、言語活動を行う中で「どうしたら伝わるだろう」と振り返らせ、そこでの気づきを自ら語ることで言語や文化に関する理解を深めてきた。そのことで自分なりに英語を学ぶことの意味づけや価値の実感を見いだしていき、その過程における気づきの連鎖を外国語科における「ものがたり」ととらえ、表出する語りや英語表現に注目してきた。一人ひとりが英語の４技能を総合的に高めながら、英語を学ぶことを意味づけたり学びの価値を実感したりし、生涯にわたって英語を学ぶ意欲を育てるための授業構築・単元構成のあり方、また言語活動における有効な語り合いやかかわり方について研究してきた。

今回の研究では、言語活動を通して主体的な学びにつなげるために、生徒が表面的に英文を読んだり書いたりするだけではなく、根拠をもって説明したり、多様な解釈がうまれる状況において、様々な観点からそれらについて吟味できるような課題設定や学習過程を工夫したい。また、日常生活や社会とのつながりを意識できる課題を設定し、自分の考えや意見をもたせ、それらを相手に伝えるときに体験や既有知識と関連づけて価値判断したり、既習の言語材料を用いて表現したりしていくなどの課題を設定する。聞き手や読み手として主体的・批判的に判断しながら理解し、互いの考えを伝え合い、表現する活動を充実することで、ものがたりをつむがせたいと研究を進めている。

【根拠をもって自分の考えを説明する生徒】

《学校保健》

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立をめざして
― 健全な自尊感情を育むことをめざした予防教育の取り組み ―

高岡　加苗

学校保健では、さまざまな健康課題に対処し、健全なライフスタイルを確立するためには、根底となる生徒の自尊感情の変容・形成を促し、「自分をこれでよい」といった感覚を養えるような健康教育が必要であると考えている。そこで、養護教諭が行う健康相談を見直し、生徒と養護教諭の間で行われる対話を「ナラティヴ・アプローチ」によって言語化させ、その効果を明らかにした。養護教諭が効果的なアプローチをすることにより、生徒の課題が焦点化され解決に向けての自己選択を促したり、自己内の力に気づけたりした。実践の積み重ねにより、養護教諭に語ることを通して生徒の意識変容が促されることが分かった。また、より良い意識変容は、健全な自尊感情を育むことへの手助けとなることも分かった。

今回の研究では、集団への指導として危険行動を抑止し自分や他者を大切にしようとする、心の予防的な教育の取り組みを実践したい。本校生徒の心身の状態を見ていくと、生活習慣の乱れによる心身の不調、相手の立場を考えて行動できないことによる人間関係のトラブル、学習に伴うストレスやプレッシャーなどが挙げられる。また、少数ではあるが、極端に低い自尊感情をもつ生徒が見られる。健全な自尊感情を育みながら、自律性の育成や対人関係を円滑に保てるよう支援していきたい。予防教育を行うことにより、ストレス、不安、いじめ、不登校、生活習慣病といった健康問題の減少をめざすと共に、生徒の自尊心、社会性、コミュニケーション能力等も同時に育みたいと考え、研究を進めている。

【性教育を通して自己の生き方を見直す様子】

総合学習シャトル

1　平成26年度（４月～７月）の実践

総合学習シャトル（以下シャトル）のねらいは、教科学習における活用と総合学習CAN（以下CAN）における探究とをつなぐことにある。

25年度から「探究に必要なスキルを学び、それらを活用して探究シミュレーションを体験する場」としての意識を、教師と生徒が共有するために講座内容を右の表のように見直した。異教科の教師ペアによる講座を開設し、「今行っている探究活動が、どのスキルを身につけるために行われているのか」を生徒に明示しながら実践することで、教科の枠を超えた探究的な学びの場であるという意識が高まってきた。

実践後のアンケート結果は以下の通りである。シャトルで学ぶのは「探究に必要なスキルである」とする意識が高まったと考えられる。

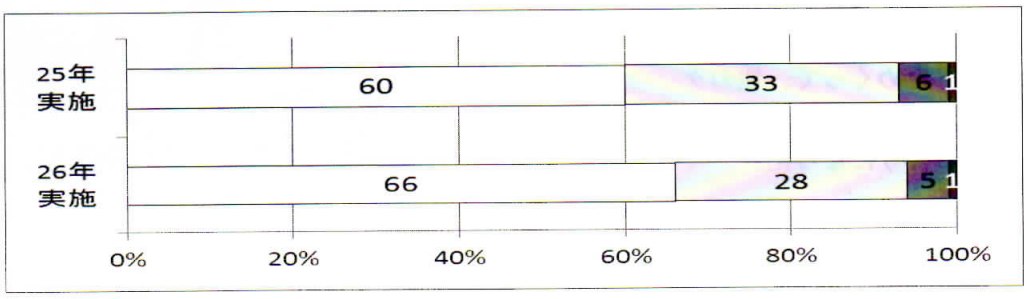
平成26年度総合学習シャトル講座　一覧表

講　座		講座内容		有効なＭＩ					
		基礎編で学ぶ主な探究スキル	実践編で行う探究シミュレーション	言語	論理	空間	身体	音楽	博物
①	発想！ 爆ＳＨＯＷ！ 仮装大ＳＨＯＷ	・発想する ・表現する ・着眼する ・分析、評価する ・分類する	仮装のテーマを考え、データの分析結果をもとに、テーマの特徴を上手く表現できるように探究していく。		○	◎	◎		○
②	集めて見たら･･･ そうだったのか!!	・着眼をする ・発想する ・比較する ・分類する ・関連づける ・表現する	身近なもの・人・ことに着目し，各自でテーマを決め，分類、比較・関連づけを行いながら，わかったことをフリーペーパー風にまとめて掲示する。	◎	◎	○			○
③	白熱！変数教室	・課題を設定する ・実験を考える ・条件を制御する ・関係を見いだす ・説得する力 ・データを収集する ・質問する	紙グライダーの性能向上のための『変数』を自ら設定し、その探究方法を考えることで、CAN につながる広い分野での研究方法を自然にマスターしていく。	○	◎	◎			◎
④	魅力ある表現を探り、自ら創り、発信しよう!	・着眼をする ・発想をする ・比較する ・関連づける ・視覚化する ・伝達する	「香川県の特産物」を県外の人に知ってもらうために表現物であるＣＭを制作していく。そして、外部発信のためのレポートをまとめる。	◎	○	○	○	◎	○
⑤	気づき！ 発見！ 身近な世界！	・着眼をする ・発想をする ・比較する ・分類する ・関連づける ・視覚化する	身近にありながらも見過ごしてきたものに気づき、写真に収め、比較・分類、考察しながら文章や言葉とつなげて一冊の本で表現する。	◎	○	◎			○
⑥	想いを形に 一瞬を物語に 自分を表現	・着眼する ・発想する ・情報を選択する ・視覚化する ・表現する ・分析、評価する	自分が伝えたいテーマから、それにふさわしい物語を考え、素材となる写真や音楽を自分たちで用意し、フォトストーリーを作って表現する。	◎		◎		○	
⑦	アイトリックの 不思議発見	・着眼をする ・発想をする ・分類する ・視覚化する ・表現する ・伝達する	アイトリックの不思議を発見し、人を驚かせたり楽しませたりするものを新たに発想し、制作し、提案する。		○	◎	◎		○
⑧	疑問解決への 架け橋	・着眼をする ・発想をする ・比較する ・関連づける ・関係を見いだす ・伝達する	自分たちの素朴な疑問などを独自調査し、わかりやすく解決していく。その結果を一番効果的な方法でまとめ、公表する。	○	◎				◎

生徒へのアンケート

【シャトル（基礎編･実践編）を通して、総合学習CANにつながる探究スキルが身についたか】

そう思う□4―　3―■―2―■1そう思わない



2　平成27年度への構想

シャトルは、探究に必要なスキルを学ぶ場として確立しつつある。一方、課題として、シャトルで学んだ探究スキルをCANに活かせなかった生徒や、学んだスキルの中に必要とするスキルがなかった生徒がいることが明らかになった。

そこで、講座内容を、以下のように刷新していく。

○　CANでの課題探究がさらに充実したものになるよう、CANの課題を分析し、それぞれの教師の専門性を活かした探究スキルを提示する

○「シャトルで身につけたい力」を再考し、与えられた知識や情報を鵜呑みにせずに複数の視点から、問題点を探し出して判断する、クリティカルシンキングなどが育成できる探究シミュレーションを実施する

【探究スキルを習得する基礎編】

【探究スキルを補足する特設講座】

【探究スキルを試行する実践編】

総合学習CAN

1　平成26年２月～11月の実践

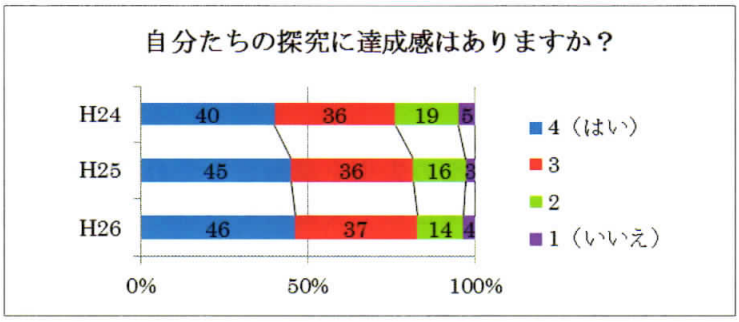
CANとは、Cluster（クラスター）、Action Learning（アクション・ラーニング）、Narrative Approach（ナラティヴ・アプローチ）の頭文字をとったものである。生徒自身が自己の「可能性」を見出していく学習にしたいという願いが込められている。

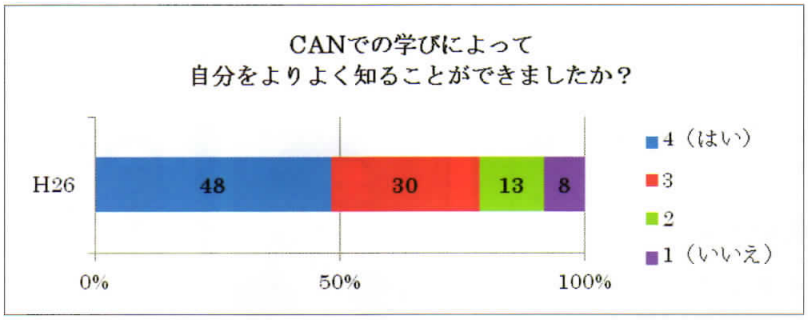
７年目を迎えたCANだが、テーマ設定における話し合いや生徒同士の発表の様子を見ていても、探究テーマに対する意識や探究内容の質が向上していることが感じられる。研究成果発信の場としては、文化祭での発表と、その事前に行われるプレ発表の２回がある。各種コンクールへの応募など、外部発信にチャレンジするクラスターもあり、学校の研究文化を象徴する「最高の学びの場」として定着してきている。

本年度実施にあたって改善した点としては、CANボードの変更が挙げられる。これまで、各クラスターに話し合いのために与えられたホワイトボードは、話し合った記録が残らなかったり、マーカーの色に限度があったりするなどの課題があった。そこで、本年度は、フラットファイルにスケッチブックをとじた「新CANボード」を用意し、探究の足跡がわかるように記録を残していった。その結果、休み時間に掲示場所の階段に並んだカラフルなボードをめくって、他のクラスターの探究の歩みを参考にする生徒がより多く見られるようになった。

【探究の歩みがわかる新CANボード】

【「CANの日」に校外で取材する生徒】





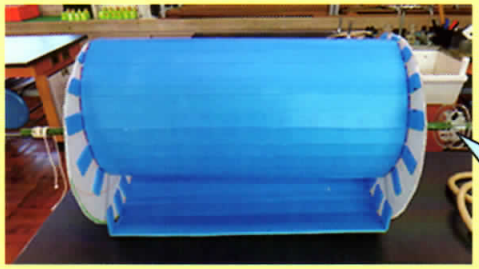
【文化祭で探究成果を発表する生徒】

2　平成27年度への構想

自由に探究テーマが設定できる反面、長い時間をかけて探究活動を行う価値のあるテーマに設定できないクラスターも見られた。また、文化祭やプレ発表での他のクラスターの発表を聞いても、自分の記録に残す程度で、生徒同士の活発な質問や意見が飛び交う姿が少なかった。そこで今後のCANでは、テーマ設定や発表の場面において、生徒が積極的に質問や意見交換を行えるように、課題設定やクリティカルな質問の方法についてのマニュアルを作成したり、行き詰まった生徒への教師のアドバイスやかかわり方を工夫したりしていく予定である。

〈最優秀研究　「青雲賞」　受賞者へのインタビューから〉

研究テーマ「clean 発電研究所」



受賞者のクラスターが作った風力発電機

自分たちでオリジナルの風力発電機を作製し、その変換効率を向上させるため何度も試作・改良を繰り返した。

Q　研究はどのようにして進めていきましたか？
A　３人で作る人とデータを取る人など役割分担をして進めていきました。それぞれが自分の得意分野で深められることを深めていき、一日の最後にお互いのやったことを共有する時間を設けるなどして進めていきました。

Q　実際に出来上がった試作品をどう思いましたか？
A　実際に試してみて外の風で本当に動いたときはうれしい気持ちでいっぱいになりました。できればもっと大きくして来年は屋上に設置してもらいたいと思います。

Q　後輩たちへのアドバイス・メッセージをお願いします。
A　「継続は力なり」
予想と違う結果が出てもデメリットをメリットに変えていけるように研究を続けていくことが重要だと思います。

研究文化の醸成

1　大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、生涯学習、キャリア教育の一環として実施している。本物の研究者から、CANへのヒントをいただく機会となることも期待している。

学　部	講　師	内　　容
教育学部	高木由美子	イオン液体の不思議
法 学 部	柴田　潤子	企業・消費者・独占禁止法
経済学部	原　　直行	瀬戸内海は豊かな海？～瀬戸内海の里海づくり～
医 学 部	峠　　哲男	年をとると体はどうなるの、どんな病気になるの
工 学 部	山口　順一	見分ける　―安心・安全のために―
農 学 部	山田　佳裕	身近な水環境を考える

2　親子セミナー

前期は藪添隆一先生（香川大学教育学部教授）より「心を育てるコミニュケーション」という演題で、後期は竹前俊昭先生（JAXA宇宙科学研究所宇宙飛翔工学研究系 助教）より「日本の宇宙探査」という演題で、研究の奥深さや生き方についてご示唆をいただいた。

あ　と　が　き

副校長　小林　理昭

平成26年度は、６月13日に**「学ぶこと」と「生きること」の統合　―語り合う中で自己の「ものがたり」をつむぐ―**　というテーマで研究発表会を行いました。当日は県内外から約800名の方々のご参加を得て、貴重なご指導やご意見をいただくことができました。

研究発表会を通して私たちは以下のようなことを確認しました。「ものがたり」の授業では、生徒が主体となることで、学びを意味づけたり価値を実感したりすることができ、それが生徒の感性に訴えかけて「学習意欲」を喚起すること。また「学習意欲」に関する研究は全国的に類を見ず、継続して研究していく価値が高いことです。一方、課題となったのは、やはり「ものがたり」の分かりにくさです。これは「ものがたり」が「学習意欲」という生徒の内面に作用するものであり、外からはその成果を可視化、数値化しにくいことからきています。ただ、これは「学習意欲」に関する研究の宿命でもあります。「わかる・できる」だけでは「学習意欲」にはつながらず、学びの意味づけや価値の実感がなければならない、そのためには、やはり「ものがたり」が必要なのです。この主張をご理解いただくためにも、より分かりやすい研究の発信に努めてまいります。今後ともご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

編　集　委　員

若林教裕　　川田英之
山城貴彦　　大西小百合
三宅健司　　渡邉広規
大和田　俊　　伊賀梨恵

平成２７年２月２５日

編集　香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町１番７号
TEL/ 0877-46-2695　FAX/ 0877-46-4428
E-mail　sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp